

Title	テイチナーに於ける感情の概念：史的回顧
Sub Title	The concept of affection in Titchener's psychology : a historical retrospect
Author	横山, 松三郎(Yokoyama, Matsusaburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.34 (1958. 1) ,p.297- 318
JaLC DOI	
Abstract	<p>This paper traces the development of that part of introspective psychology, which concerns the problem of the nature of affective process, during the first three decades of the present century, with especial reference to Titchener's views both before and after the publication of Nafe's experiment in 1924. The contents of the main chapters may be summarized as follows: The program of existential psychology. According to Titchener, the subject-matter of psychology is consciousness or existential experience regarded as dependent upon the nervous system, its method is introspection or rather observation as he prefers to call it in his later years and its problem is to describe and explain the subjectmatter as in any other science. In his system, the concept of mental elements plays a leading role; he is par excellence a psychologist of elementarism. Titchener's view of affection (ca. 1908-1924). In this chapter, the writer outlines Titchener's view of affection as revealed principally in his "Psychology of feeling and attention", "A text-book of psychology" and "A beginner's psychology". Among the three possible views regarding the status of affection, i.e., 1) affection as an independent mental element, distinct from and co-ordinate with sensation, 2) as an attribute of sensation and 3) as a sensation, Titchener chooses the first as logically and experimentally most plausible. Affection is distinguished from sensation by the opposition of its qualities, P and U and by the lack of the attribute of clearness. Examination of Titchener's view of affection. This chapter reviews the experiments of T. Nakashima, B. Koch, M. Yokoyama and J. P. Nafe. The writer points out on the one hand that the results of Nakashima and Koch failed to support the doctrine that affection is an independent mental element and on the other hand questions the validity of Nafe's conclusion that P and U are patterns of specific sensory experiences, namely bright and dull pressures. With respect to his own experiment he writes that his conclusion that P and U are most universally and definitely statable as meanings is acceptable as far as concerns the results of the method of paired comparison. The final chapter is devoted solely to the discussion of Nafe's works. By a careful scrutiny of the introspective reports of the observers, the writer finds that they could not pay direct attention to P and U to the total exclusion of the (accompanying) sensory experience, showing that affective experience they had lacked the attribute of clearness. Thus, Nafe's statement, "affection is palpable; it stands up under observation" should be taken to mean that affection is cognitively and not attributively, clear and accordingly, P and U in his experiment may be best accounted for as meanings. He wonders why Titchener, knowing that affection lacks the attributive clearness, could accept Nafe's conclusion that P and U are sensations. (1) The word in parenthesis is inserted by the writer to make the statement clear.</p>
Notes	小林澄兄先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000034-0297

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ティチナーに於ける感情の概念

—— 史的 回顧 ——

横 山 松 三 郎

は し が き

イー・ビー・ティチナーは、実験心理学に於けるヴントの正統な後継者と見做されている。事実、彼はヴントの数ある弟子のうちで師の立場を最も徹底的にそうして最も論理的に展開した唯一の学者であり、いわば、ヴント心理学の完成者であつたといふことができる。彼の心理学体系は、ウィリアム・ジェームスによつて構成心理学と命名され、彼自身もまた一時この呼称をしばしば用いていた。しかし、晩年にいたつて、科学は純粹経験のみを扱ふべきであるという強い信念に基づき自己の心理学を実存心理学と改称した。

以下、筆者は先づ最初にティチナーの心理学的構想を概観し、次いでその体系に於いて感情がどのような位置にあつたかを考察して見度いと思う。

実存心理学の綱領

対象——実存心理学の対象は意識であり、それは依存的経験と定義される。ティチナーによれば、科学はすべて経験から出発するのであるが、心理学は、経験を経験の主体に依存するものとして扱い、物理学は、経験を経験の主体から独立したものととして扱う。したがって、両者の相違は経験に対するアプローチの仕方における相違に帰せられる。ここに、経験の主体とは有機体のことをいうのであるが、有機体の統一的体制は神経系統の機能に負っているのであるから、後者を以て前者に置き換えて差支えない。尙、科学としての心理学は意味を扱うべきでないから、依存的経験は意味を捨象した実存的経験を指し、かくして心理学は神経系統との依存関係に於いて実存的経験を研究する科学であるということになるのである。

方法——心理学の方法は観察であつて、それは物理学に於ける観察と本質的に異なるところはない。心理学的観察とは、心理学的立場から経験を明瞭にとらえ、適確な言葉でそれを仔細に報告することである。ティチナーの公式は、

PSYCHOLOGICAL OBSERVATION = PSYCHOLOGICAL (VIVID EXPERIENCE → FULL REPORT)

となつてゐる。このような方法は、一般に内観法または内省法といわれ、ティチナーもまた最初そう呼んでいたのであるが、内省という言葉に歴史的に含まれているエソテリックな意味を嫌つて後には特に観察と称したのである。

問題とその解き方——心理学は意識に関して三つの問いを提起する。すなわち、(一)意識はどんな内容から成立しているか(What?)、(二)どのようにして生起するか(How?)、(三)どんな原因で生起するか(Why?)ということである。第一の問いに対する答は分析である。心理学者は先ず観察をもとにして意識過程を分析し、最も単純な組成分子を発見する。これを心的要素といい、感覚はその代表的なものの一つである。次に要素のもついろいろの方面——これを属性または次元と呼ぶ——を決定する。こうして意識過程は要素と属性ということばで記述されるのである。第二の問いに対する答は総合である。すなわち、おのおのの意識過程がどんな要素によつて、どんな条件の下に組織されるかを観察して心的結合及び推移の法則を明らかにする。この関係に於いて連合説が援用されることは言をまたない。第三の問いに対してティチナーは精神物理的平行論の立場から意識過程と神経過程との間の相関を求め、意識の生起する原因を説明する。

附記 ティチナーは一九二七年に死んだがその数年前から彼の心理思想には可成りの変化が起つたといわれている。しかし、筆者はその噂を知っているだけであるから、此処では彼の名に於いて公表せられた文献だけを土台として記述したに止まる。

ティチナーの感情論

上述の綱領から推測できるように、ティチナーの心理学は要素論に基礎を置くものであり、意識の組成分子——心的要素——の種類、数及びそのおのおのの性質等の決定が彼にとつて最も重要な先決問題であつたことは明らかである。

ろう。

ティチナーは一九〇八年二月にコロムビア大学の招聘に応じ、前後八回に亘つて「感情と注意の心理学」と題する講演を行つた。彼はその冒頭に於いて、およそ心理学体系の性格なるものは感覚（と心像）、感情及び注意に関する著者の見解如何によつて決定されると述べた。当時、心理学界に於いて感覚の要素性について疑問を抱いていた学者は殆んどなく、心理学に於ける基石の一つとしてのその地位は確固不動のものであつた。もちろん、感覚を以て意識の記述的単位と見るべきか或は論理的単位と見るべきか、またその属性の数はいくつあるか等の問題については学者の間に烈しい論争が続けられていたが、感覚が意識を構成する一要素であることに對して異議を挿む者はなかつたのである。しかるに、感情の要素性⁽¹⁾に関する指導的学者たちの見解は必しも一致していなかつた、否、寧ろ対立していたといった方がもつと正確であろう。感情を感覚とは別個の独立的要素と主張するもの、感覚の一種と見るもの、感覚の属性とするもの等、彼等の意見は少くとも三つに分かれていた。そこで、ティチナーの感情論はこれ等の見解に対する批判と分析から出発する。

ヴントは一八九六年版の心理学概論に於いて始めて感情の独立性を認めるようになったのであるが、それ以前、たとえば生理的心理学の第四版（一八九三年）頃は感情を以て感覚の属性であると考えていた。ツィーエンもまた一九〇六年版の心理学入門に於いてヴントと同一の説を発表し、感情は感覚の属性ではあるがそれ自身の性質（快と不快）及び強度等の属性を持つてゐる。但し感情の強度は感覚のそれと異なる法則にしたがつて変化すると述べていた。⁽²⁾

しかし、このような説は既に一八九三年にキェルペによつて論駁されている。キェルペにしたがえば、若し感情

が感覚の属性であるならば、感情はそれ自らの属性を持つことはできない筈である。というのは、属性は定義によつて描叙することができない (INDESCRIBABLE) のであるからである。しかるに、実際に於いて感情は性質、強度及び持続の三属性を具えているのであつて、感情を属性とすれば属性が属性を持つという矛盾におちいることになる。また、属性のもう一つの特徴はその不可分性 (INSEPARABILITY) である。すなわち、それはある感覚からその属性の一つを消去すれば、残余の属性したがつて感覚全体が消滅してしまうことを意味する。なるほど多くの感覚的経験は快或は不快を伴う。がしかし、快でも不快でもない全く中性の感覚も存在するのであるから、快・不快を感覚の属性とすることはこの不可分性の原理に悖ることになるというのである。

しかし、ツィーエン自身はかかる異論に対し、化学作用との類似を基礎として自説を因執した。例えば、酸化作用の如きは、強度も性質もあり、しばしば光も発する。しかも、光そのものは強度と性質をもっているのである。光を酸化作用の一属性と見做せば属性が属性を持つことは可能であろうと主張したが、これはシュツムプも指摘しているように、心理学でいう属性の意味と通俗的な意味とを混同した結果おちついた謬論である。他方、ツィーエンはキュルペの不可分性の原理に基づく議論に対しても快及び不快は感覚の属性であるが必然且つ不可欠の属性であるわけではないと弁明している。しかし、全体として彼の論拠が薄弱であることは疑いのないところであろう。次ぎに、感情を感覚の一種であると思ふ立場はどうであらうか。ブルドンは一八九三年発表の「快の感覚」と題する論文に於いて快と「くすぐつたい」感覚とを同一視し、フォン・フライ (一八九四年) は不快を痛覚、快を痛の回避と見た。シュツムプは感情感覚説を唱え、不快に対しては皮膚及び内部器官に於ける強度の弱い痛覚、快感に対しては身体的健康感、微弱な「くすぐつたい」又は「かゆい」感覚等を当てた。そうして色、音、臭い、

味、温度等の感覚に於ける快・不快は、それ等に同伴して生起する痛覚、「くすぐつたい」感覚、「かゆい」感覚等から成立つものとした。このような説に対するティチナーの反応は以下の如くである。

「くすぐつたい」感覚、身体的健康感、痛覚等が多くの場合快又は不快を伴うことは疑問の余地のないところであるが、それ等の感覚は皆それぞれ自身の性質を持つている。われわれは、例えば、「くすぐつたい」感覚を単に快感覚、痛覚を不快感と形容しただけではそれ等を心理学的に十分描叙し得たとはいえない。というのは、「くすぐつたい」感覚は感覚としてそれ特有の「くすぐつたい」性質をもち、痛覚は明るいかゆ味のある痛、刺すような痛、突くような痛等いろいろの性質を持つているのである。くすぐつたくて同時に快である経験或はかゆ味があつて同時に不快な経験は、単に快感覚、不快感覚と記述しただけではその内容が明示され、正確に定義されたとはいえないのである。更にまた「くすぐつたい」感覚でも身体的健康感でもその時の事情如何によつて快とも不快ともなるのである。痛覚についても、勿論同じことがいえよう。例えば、腫物を押して膿を出す時或はかゆい場所をかく時、痛みと快が同時に起ることは周知の事実であろう。

以上述べたような理由によつて、ティチナーは感情を感覚の属性とする説にも、感覚の一種であるとする説にも加担しない。それならば、第三の感情は感覚と異なる別個の心的要素であるという説は如何であつたらうか。結論からいえば、ティチナーはこの第三説を選んだのであるが、それは第一と第二の説が成立たないという消極的な理由だけによつたものではなかつた。

前にも述べたように、感情と感覚とは性質、強度及び持続の三属性を共通に持つている点で相互に可成り類似していると考えられていたのであるが、然も両者が全く異なる心的過程であるというならば、それ等を区別する何等

かの基準がなくてはならない。其処で、ティチナーは従来から諸学者によつて提出されていたいろいろの基準を吟味して六つの範疇に分け、一つ一つその妥当性について検討を加えた上で自己の立場を決定したのである。

以下、それ等の基準を列举し、その各々に対するティチナー並びに彼が引用した他の学者の見解を簡単に紹介して見よう。⁽³⁾

一、主観性・客観性——感情は主観的であり、感覚は客観的である。

評——(イ)感情は融合する傾向をもつという点に於いて主観的である (Wundt)。融合傾向は、強度や性質の如き単一の心的要素の属性として扱えないから基準とすることはできない (Titchener)。(ロ)感覚はすべての個人によつて、また、同一個人に於いても時と場合によつて、経験され方が違うという意味で主観的である (Anon)。しかし、これに対しては上掲の否定的批判がそのままあてはまる (Titchener)。その上、同一刺激も順応によつて異なる感覚を生ずることがある (Titchener, Stumpf)。(ハ)感覚はそれのみ単独に意識に現われるが、感情はいつも感覚に同伴して現われるという意味に於いて主観的であるといえる (Anon)。しかし、感覚が存在しない時にも感情が起ることがある (Kuelpe)し、感情が感覚に先行する場合もある (Ladd)。

二、定位——感覚は定位されるが、感情は定位することができない。

評——これは、(イ)外的定位すなわち知覚的空間内に於ける位置と、(ロ)内的定位すなわち意識内に於ける位置との決定に分かれる。(イ)感覚には局所示標があるのに対し感情にはそれが無い (von Frey)。嗅覚は定位できない (Nagel)。単耳聴の場合純音は定位できない (Angell & Fite)。ある種の音は定位できない (Pierce)。有機感覚は定位できない (Orin)。快と不快は明確な定位性をもっているとはいえないだろうが、ある種の空間的契機を含む

でいる (Stumpf)。 (ロ) 快と不快とが同時に意識に現われること、すなわち、混合感情があるという意味に於いて感情も定位できるといえる (Ebbinghaus, Johnston)。混合感情は存在しない (Wundt, Kuelpe, Titchener, Orth, Alechsielt, Hayes)。

三、質的対立——感覚の性質は最大差異によつて限られ、感情の性質 (快と不快) は最大対立によつて限られている。

評——感覚の性質の間には差異はあつても対立はない。しかし、感情はそれと異なり、快または不快を減少して行けば快でも不快でもない中性の点に達するが、快が不快になり、不快が快になることは決してない。快と不快は、この中性の点を境として対立的関係にある (Wundt, Titchener)。冷覚と温覚、空腹感と満腹感、身体的清新感と疲労感等は互に対立する (Orth, Ebbinghaus)。刺戟の温度を増減することによつて、冷覚が温覚に、温覚が冷覚に、中性の点を通つて変化するが、この事實は感情を除いて、他の感覚には見出すことはできない (Kuelpe)。仮りに冷覚と温覚が対立するとしても、それ等は別々の感覚であつて同一の感覚の異なる性質ではない。また、空腹感と満腹感、清新感と疲労感等の間の相違は性質上の差異であつて対立ではない (Titchener)。

四、表象感情——感覚は心像よりも一般に強度が高いが、心像に伴う感情は感覚に伴う感情と強度に於いて基本的な差はない。

評——表象に伴う快は、感覚に伴う快よりも弱い (Ladd)。若し感覚と心像が内観に於いて区別できないものであるなら、この基準は無意味である (Stumpf)。

五、順 応——感情は時間の経過に伴つて消滅するか、またはその性質を変えてしまう。見慣れた景色は、感覚

的には必しも順応の現象を示さない場合でも、感情的には順応して中性となる。

評——快・不快は順応によつて反対の性質に変化する (Ebbinghaus)。感情が順応によつてその性質を変えることはない (Kuelpe)。感情の順応は感覚の順応に基づくものである。順応のもとに感情の性質が変化するとするならば、それは間接的に他の刺激によつて齎らされるのである (Lehmann)。感情の順応は感覚の順応と同一範疇に属するものである (Titchener)。

六、明瞭性——感情は、属性としてすべての感覚がもっている明瞭性を欠いている。感覚は注意のもとに明瞭になるが、感情に直接注意を向けることは不可能である。感情を同伴する感覚に注意を向けると感情の強度は増進するが、感情自体に注意を向けるとそれは消滅してしまうか或は少くともその強度を減少する。

(この基準はキェルペによつて提唱され、ティチナー、ツォネフ及びエビングハウス等によつて強く支持されている。)

評——レーマンによれば有意的注意のもとに感情は意識の前面に齎らされる (Saxinger)。しかし、ザクシンガーはレーマンの記述を誤解しているのである (Titchener)。

右に掲げた各種の基準並びにその各々に対する諸家の見解及びその根拠をなす一連の実験的事実を比較考慮した結果、ティチナーは、順応と表象感情に関する基準はこれを棄却して差支えなく、主観性と定位に関するものは尙検討の余地あるものと見做し、明瞭性の欠除及び質的対立を最も妥当な基準として採用した。

彼によれば、質的対立は快と不快とが意識と同延であり同時に意識に顕在することはできない、従つて定位することも不可能であるとの意味を指向するものである。更に、明瞭性の欠除は主観性の問題にも関連をもつ。という

のは、感情は慥に有機感覚と類似しているが、その結構に於いて異なるところがあるからである。すなわち、前者は後者と比較して、より柔く、より安定性と自立性に乏しい。而してこの相違は明瞭性の有無とも関係があるであろうが、同時に主観性と客観性による相違であるといえない理由はないであろう。と論じている。⁽⁴⁾かくして、テイチナーは、感情は感覚とは別個の独立的心的過程であるという結論に達したのである。

テイチナー説の吟味

テイチナーはその後少くとも十数年の間右に述べた結論を支持していたようであるが、しかし彼の立場は必しも終始安泰であつたわけではなかつた。

一九〇九年に中島は彼のもとに於いて行つた感情の性質に関する実験を発表した。それによると、実験の初期に於ける感情判断は間接的であつて有機感覚、連想或は他の表象の媒介を経て行われるが、後期にいたると直接刺激の感受と同時に行われるというのであつた。中島は間接的感情判断は不純であるとし、それ等を全然排除し直接的判断を以て純粹の感情判断であるとした。しかし被験者の内観報告からは、感情をユニークな心的過程とするテイチナー説を支持する積極的事実は何も得られなかつた。

中島より数年遅れてコッホは混合感情に関する一連の実験を報告した。この研究に於いて彼は感情の本質の問題に触れ、多数の文献を渉獵して感情を感覚と区別するために諸家によつて挙げられた十二の基準を発見し、それ等が果して事実適合するものであるか否かを実験的に吟味した。彼の蒐集した基準は次の通りである。

一、快・不快は特殊の感覚器官とは関係なしに生起する。

二、外的刺激とは比較的無関係である。

三、全体意識に依存する。

四、認知（感性的）過程が同伴しない限り生起しない。

五、普通の場合感性的内容よりも潜時は長い。

六、感性的内容の消滅とともに消滅する。

七、常に注意の発現を促進する。

八、注意のもとに減衰する。

九、客観化されず、主観の状態として経験される。

一〇、表象として再生できない。

一一、快と不快は両立せず、対立的である。

一二、快・不快は定位できない。

精密なる実験の結果、コッホは下記の原因によつて上記の基準の妥当性を否定した。（数字は基準の番号に対応する。）

一、観察者は快・不快が常に有機感覚を伴うと報告している。

二、快・不快のみならず有機感覚についても真である。

三、快・不快のみならず有機感覚についても真である。

四、観察者は快・不快が認知過程に先行する可能性のあることを報告している。

五、観察者は特に表象として再生する場合に快・不快が感性的内容と同時に生起し、また時々それに先行することを報告している。

六、観察者は快・不快がそれと関係ある感性的内容の消滅後にも持続する場合のあることを報告している。

七、観察者は快・不快が注意によつて弱められると報告している。

八、観察者は快または不快が注意のもとに強度を増す場合のあることを報告している。

九、有機感覚にも当はまる。

一〇、観察者は表象的快或は不快を報告している。

一一、観察者は快と不快の共在を報告している。

一二、観察者の報告には定位された快または不快の事例がある。

以上によつて明らかのように、コッホは感情を感覚と区別する妥当な根拠を掴むことができなかった。結果は寧ろ消極的方向を指示していたのである。⁽⁵⁾

一九一八年から一九二〇年にかけて、筆者は色彩図形を刺激として一対比較法により「感情総和説」の実験的検証を試み、その際内観に熟達した四名の被験者(B、D、F、P)から多数の報告を得、それ等を分析することによつて感情判断に関する新たな事実を獲得した。すなわち、快と不快は全被験を通じて——BとDに於いては常に、Fに於いては実験のある期間中一貫して、Pに於いてはしばしば——心理的意味と解することができる。また実験の末期を除いて、快・不快は必ず有機感覚を——BとDに於いてはそれ等の担い手として、Fに於いては同伴

者として或は担い手として、Pに於いては同伴者として——伴うことを知った、この実験の結果から筆者は次のように結論した。

(イ) 快・不快の情は最も普遍的に且つ明確に意味として記述することができる。(ロ) 快・不快の意識的担い手である心的過程は感覚主として有機感覚である。而して(ハ)この感情の担い手たる感覚過程は時間的に推移する、すなわち実験の初期に於いては極めて豊富な内容をもっているが、漸次減衰して行き、竟に後期にいたつては内容のない単なる身体的態度に墮してしまふ、と。

もちろん、以上の陳述は決定的であるとはいえない。被験者のうちには感情が意味であると明言しなかつたものもあり、また方法も一対比較法に限られていたのである。

筆者は一九二〇年の秋にティチナーを盟主としていた実験心理学者の会合の席に於いて前述の研究を報告し、次いで彼の要求に応じてその内容を翌年の「アメリカ心理学雑誌」に発表した。筆者の結論が彼にある刺激を与えたことは事実であつた。果せるかな、彼は間もなくその弟子ネーフをして全く新たな立場から感情の本質について再検討させるにいたつた。ネーフの実験結果は一九二四年の「アメリカ心理学雑誌」に掲載されている。

ネーフは、要素的過程が心理学の実在として扱われるためには内観的分析に於いて直接観察できるものでなくてはならないという仮定を立て、八名の被験者に視覚、聴覚、嗅覚、味覚及び触覚等の刺激を与え、左記の教示の下に快・不快の経験の内観報告を求めた。

『私はあなたに対して適度に快な或は不快な感覚的経験を齎らすような刺激を与えます。あなたはあなたの経験の感情的方面だけに注意を向けなさい。感情が最高に達したと判断したとき観察を中止してできるだけ正確に

その感情を記述しなさい。』

実験の結果はネーフによつて次のように要約されている。

一、感覚的経験は感情的であることもあるし、ないこともある——それは快・不快或は快でも不快でもないと報告される。感覚的経験が快或は不快になると経験全体が変化し、中性である間なかつたあるものが附加される。

二、この附加物は、質的に見て快経験の場合は明るい圧または明るい圧とくすぐつたい感覚との中間に位置する触覚的性質であり、不快経験の場合はにぶい圧またはその附近に位置する性質である。⁽⁶⁾

三、明るい圧は、大体同じ強度のにぶい圧よりもつと拡がつており、一般にそれと同伴する感覚的経験よりも大きな拡がりをもっている。快は非常に広大で限界も拘束もない。不快は快程ではないが、広大で限界がない。しかし何んとなく拘束され、収斂されている。快も不快も明確な形も限界も境界もない。

四、感情的附加物はときおり残余の経験と融合し、またときおり決して完全ではないが準空間的に分離されている。

五、快と不快は本来弱く柔かだが、強度の変化はある。被験者は常に同一の変量に於ける変化を強度の変化として報告するわけではない。快の強度は、明るさ(圧の)が増加するとき、拡がりが増加するとき、増加することがあるし、また色の飽和度の如きある変量の増加或は刺激強度の増加とともに増加することがある。不快の強度はにぶさ(圧の)が増加するとき、拡がりが増加するとき、密度が増加するとき、または刺激強度が増加するとき、増加することがある。

六、快と不快の双方に対して共に密度の型がある。快は放射状の線を描き、中心から離れたところから周辺に向

つて、特に密度と強度が高く抜んで目立っている。不快は中心に於いて特に顕著である。快・不快とも周辺の限界に於いては——たとえ境界という意味での明確な限界があるわけではないが——減衰している。

七、強度が高くなると感情経験は知覚的となり、不快の場合は情動に移行する。この移行は、快については報告されていない。

八、一つの経験に於ける感情的成分は感覚的成分と同時に進行する。前者は後者より遅れて意識にのぼる。快は漸進的にはあるが急速に、不快は十分な強度をもつて、現われる。快も不快も連続的或は間歇的経過をたどり、感覚的（又は心像的）成分とともに、或はその消滅する前に消滅する。

九、感情は観察可能であり、観察下に於いて明白とする。

一〇、感情的成分は明確に定位されない。普通は全然定位されない。しかし、それは身体内部にあるものとして、または身体の外に投影されたものとして、漠然と定位され、或は身体の多少はつきりと限定された場所に定位されることもある。感情が明白に意識せられる場合には定位されないということを示す若干の証拠がある。

一一、快も不快も単独で現われることはない。感情的成分はいろいろの仕方で全体の経験の感覚的成分に連結する。

一二、感情は有機感覚によつて担われた単なる意味ではないし、有機感覚の融合でもない。

一三、あらゆる感覚部門の経験は、明るい圧またはにぶい圧の附加物をうけることができる。すなわち、感情的経験となることができる。観察できる感情的経験を起すには、刺激はあまり強いものでない方がよく、知覚的経験を齎らすような強烈なものであつてはならない。そうして観察者は心理学的、非知覚的態度を保たねばならない。

この限界内に於いて態度は能動的であつて宜しい。

一四、快と不快は恰も同一の鑄型から作られているかのように、根本的に類似している。両者の相違は同一の様相内に起るような類のものである。

一五、質の上から見て、いろいろの種類快や不快はない。どんな快または不快の拡がりにも質的差別はない。

一六、快と不快が同時に起ることはない。非常な速度を以て交替的に現われることはできる。

ネーフはこの報告に於いて以上の結果の体系的意義につき何等の意見も開陳していないが、その後発表せられた二つの論文で彼は自己の立場を明らかにし、快・不快はそれぞれ特殊の感覺的経験、すなわち、明るい圧とにぶい圧の型であると断定した。彼の説明によれば、心理学的経験として快は一種の「ときめき」——しかし、普通かなり強度の低いものであるが——ともいう可き一般的性質を帯びた幾つかの不連続な明るい点の経験から成立つてゐる。快は漠然とではあるが胴の上部に定位され、急速に順応または減衰する。不快は快に類似しているが、特ににぶい、重々しいそうしてもつと圧党の型に入る類の経験であり、腹部または胴の下部に定位される、というのである。

ネーフの實驗はその後ヤングとハントによつて各別々に追試された。しかし、ここではヤングが否定的結論を出しているのに対してハントは快・不快と明るい圧及びにぶい圧との間に高い相関を見出したことだけをいへば十分であらう。⁽⁷⁾

ティチナーがネーフの結果に如何なる反応を示したかは、公表せられた彼の著書や論文によつては知る由もな

い。ただ、ネーフの研究がティチナーの実験室に於いて、ティチナーの構想と指導のもとに行われ、その経過が彼の編集せる「アメリカ心理学雑誌」に発表せられていることから推して、彼が従来から主張してきた感情の独立的要素説を潔く放棄し、新たに感情を感覚の一種とする立場を採るにいたつたものと考えて差支えなからう。死後刊行せられた「体系的心理学序論」の中で、ティチナーは心理学の対象をその内容の面に於いて「感覺的」という術語を以て形容している事実は筆者のこの推測の妥当なことを裏書するものである。⁽⁸⁾

む す び

ネーフの実験は慥に感情心理学に於ける一つの画期的研究であつたといえよう。しかし、筆者は彼の結論が妥当であつたか否かについて、多少の疑問をもたざるを得ないのである。既に述べたように、感情には明瞭性の属性がないから、注意の対象とならないということはティチナーやキェルペ等の主張したところである。したがつて、感情を観察する場合には、感情そのものではなく、それに同伴する全過程に注意を向け、間接的にそれを把握する以外に方法はないといわれて来ていた。しかるに、ネーフは、感情が心理学の実在であるならば、それは直接観察せられねばならぬという前提から出発して、刺激によつて解発せられる全意識過程のうち、特に感情的経験のみに注意せよとの教示を与え、実験の結果、快と不快はそれぞれ圧党の型であるとの結論に到達したのである。

筆者はこの結論を一読して、被験者たちが恐らく彼の教示を忠実に守り、自分等の経験の感情的方面に注意を集めたため、肝心の感情は消滅し、代りにその残骸ともいう可き感覚過程を捉え、それを感情と誤認して報告した

のではないかと判断した。すなわち、ネーフは自ら設定した方法と教示によつて、最初から、意識的にあるいは無意識的に、予期していた結果を収獲したに過ぎないのだと考えたのである。というのは、周知の如く、事實は方法の函数であるからである。

一方、内観報告を吟味して見ると、被験者たちは一様に、全経験のうち感情だけに注意を向けることは不可能である。若しそうするならば感情は減衰してしまふ、といつてゐるのである。ネーフ自身もまた、「感情は観察可能 (palpable) であり、観察の下に明白となる (stands up)」。被験者のすべては快も不快も観察することができた。しかし、誰も感覚的経験を全然除外して快または不快だけに注意することはできなかった。とはいへ、快または不快は全体経験の最も顕著な (dominant) 部分を占め、被験者はそれについて感覚過程よりももつと多くを知り且つ報告することができると述べてゐる。したがつて、前掲の筆者の判断には修正が加えられなくてはならないであろう。但し、ここに問題となるのは、「明白」とか「顕著」という言葉が心理学的に、一体どんな意味に用いられてゐるかということである。それ等が一種の「明瞭性 clearness」を意味していることは確實であらう。しかし、その「明瞭性」は決して「属性的明瞭性」でないことも確實であらう。というのは、被験者の報告にもあるように、感情は注意の直接的対象とならなかつたからである。それは寧ろ「認識的明瞭性」を指すものと解す可きであらう。そうして若しこの解釈が正しいとするならば、彼等が観察したのは感覚としての感情ではなくて心理的意味としてのそれであつたといふことができる。(9)

次に、ネーフは、感覚的経験が快または不快になると経験全体が変化し、そこに或るものが——快の場合には明るい圧、不快の場合にはにぶい圧——が附加されることを認め、快と不快をそれぞれ明るい圧及びにぶい圧と同一

視したのであるが、他方、彼の追試を行つたハントは快・不快とこれ等の圧覚との間に高い相関を得、単に快・不快は明るい圧及びにぶい圧に同伴するという見解を表明したに過ぎない。いずれにせよ、快・不快とこれ等の圧覚との間に密接な関係のあることは動かすことのできない事実であろう。そうして筆者は前節で述べた考察をも参照して、その関係を意味とその担い手との関係と見るのである。換言すれば、快と不快とは心理学的には「意味」であつて、明るい圧とにぶい圧とはそれぞれ等の担い手であると考えるのである。快・不快を意味であると主張するには、前に紹介した筆者の実験結果その他いろいろの根拠があるが、それ等については嘗て発表した拙稿を参照され度い。終りに、筆者は、ティチナーが何故に属性的明瞭性を欠除することが実験的に証明された快・不快を感覚とするネーフの結論を認容したか了解に苦しむものである。⁽¹⁰⁾

参 考 文 献

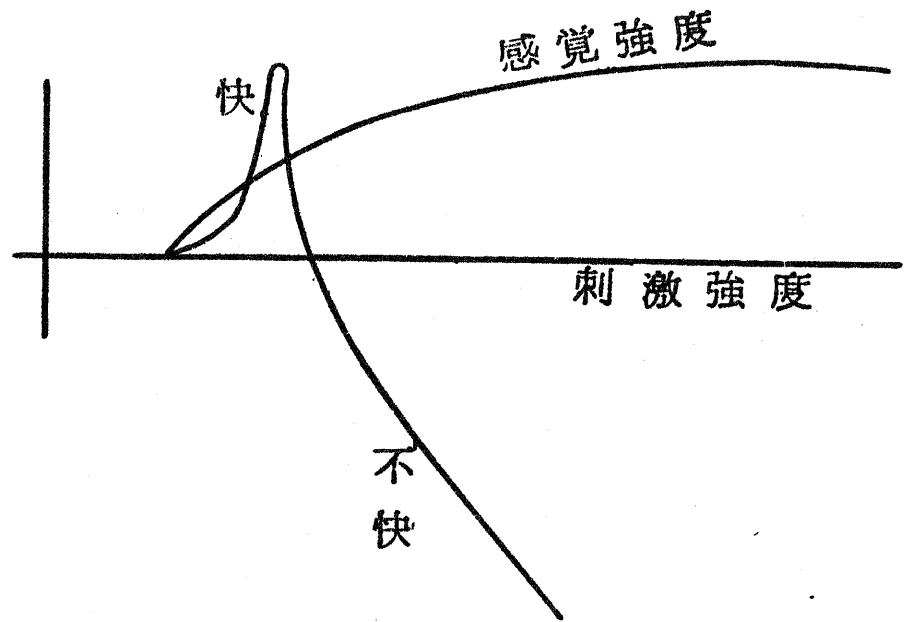
- 1 Titchener, E. B. *A Text-Book of Psychology*, 1910.
- 2 " " *A Beginner's Psychology*, 1915.
- 3 " " *Systematic Psychology: Prolegomena*, 1929.
- 4 " " *The Psychology of Feeling and Attention*, 1908.
- 5 " " *Amer. Jour. Psychol.*, 23, 1912, 165.
- 6 Wundt, W. *Grundriss d. Psychologie*, 1896.
- 7 " " *Grundzüge d. Physiol. Psychologie*, 3te Aufl., 1893.
- 8 Ziehen, Th. *Leitfaden d. Physiol. Psychologie*, 1906.
- 9 Kuelpe, O. *Grundriss d. Psychologie*, 1893.

- 10 Bourdon, B. *La sensation de plaisir*, *Rev. philos.*, Sept., 1893.
 - 11 Frey, M. von *Die Gefühle*, 1894.
 - 12 Beebe-Cenier, J. G. *The Psychology of Pleasantness and Unpleasantness*, 1932.
 - 13 Ruchnick, C. A. *The Psychology of Feeling and Emotion*, 1936.
 - 14 Gardiner, H. M., Metcalf, R. C. and Beebe-Center, J. G. *Feeling and Emotion: A History of Theories*, 1937.
 - 15 Koch, B. Experimentelle Untersuchungen über die elementaren Gefühlsqualitäten; 1913.
 - 16 Nakashima, T. *Amer. Jour. Psychol.*, 20, 1909, 157—193.
 - 17 Yokoyama, M. *Amer. Jour. Psychol.*, 32, 1921, 357—370.
 - 18 Nafe, J. P. *Amer. Jour. Psychol.*, 35, 1924, 507—544.
 - 19 " " *Amer. Jour. Psychol.*, 39, 1927, 367—389.
 - 20 " " *The Sense of Feeling in The Foundation of Experimental Psychology*, 392—413, 1929.
 - 21 Hunt, W. A. *Amer. Jour. Psychol.*, 43, 1931, 87—92.
 - 22 Young, P. T. *Amer. Jour. Psychol.*, 38, 1927, 157—193.
 - 23 Converse, E. *Amer. Jour. Psychol.*, 44, 1932, 740—748.
 - 24 Boring, E. G. *The Physical Dimensions of Consciousness*, 1933.
 - 25 横山松三郎「感情の本質に関する一考察」心理学論文集（日本心理学会第一回大会報告）三〇—三三。昭和三年。
- 其他、「ティチナーの感情論」の章に引用されている著者及び彼等の著書・論文等に関しては、文献4の末尾を見よ。

註

- 1 本稿では感情として快及び不快のみを扱う。
- 2 ツィーエンは、刺激強度、感覚強度及び感情の強度の間の関係を次のような図で示している。図は一九二〇年版の *Leit-*

註 2 図



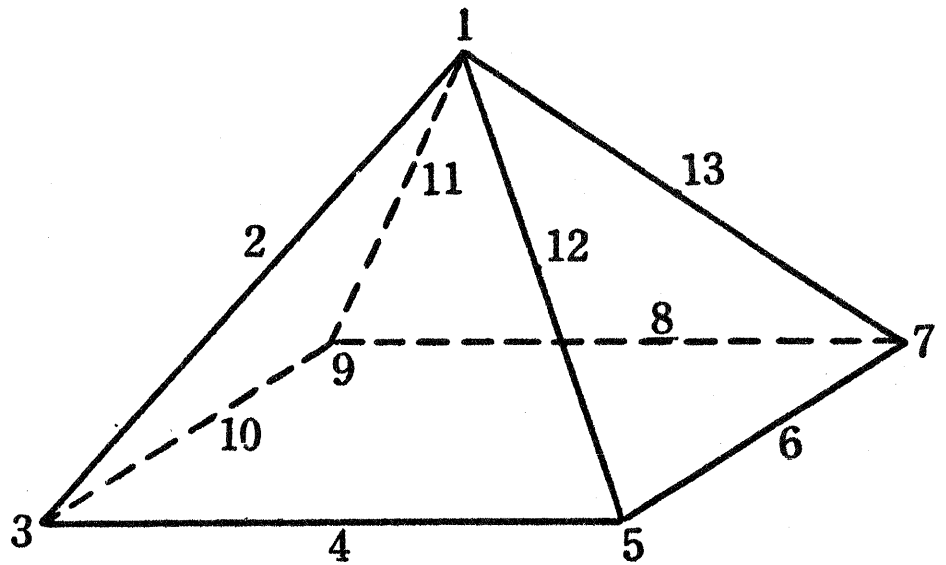
faden, p. 242 による。

3 次の記述では、先ず最初に一つの基準を挙げ、次にそれに対する諸家の「評」を掲げた。評者の名は各文の末尾に記した。
特に名が書いてないものは Anon. としてある。

4 此処の記述は Text-Book, p. 234 によつた。

ティチナーに於ける感情の概念

註 6 図



- | | |
|---------------------|----------------|
| 1. Tickle | 8. Clear pain |
| 2. Bright pressure | 9. Ache |
| 3. Strain | 10. Drag |
| 4. Dull pressure | 11. Quick pain |
| 5. Neutral pressure | 12. Contact |
| 6. Heat | 13. Itch |
| 7. Prick | |

5 コツホの原著が手元にないので Beebe-Center の記述によった。

6 明るい圧 (bright pressure) と鈍い圧 (dull pressure) の性質と他の触覚の性質との関係を、ティチナーの触金字塔 (A touch pyramid, *Amer. Jour. Psychol.*, 31, 1920, 212-214) を借りて図示すれば註6図のようになる。

7 その後コンヴァースがハントの追試を行つたが、感情と圧覚との相関はあまり高くなかつた。

8 ボーリング (文献24第19頁) も "Titchener could conclude (posthumously, 1929) that introspective psychology deals solely with sensory materials." と書いている。

9 ここにいう「属性的明瞭」と「認識的明瞭」は、それぞれデカルトの「判明」と「明晰」に対応すると見て差支えなからう。尚、ネーフが感情の「明瞭性」について記述する場合、決して clear とか vivid (両方とも属性的明瞭性を現わす言葉であるが) という語を用いずに dominant とか stands up という語を用いたことは注目に値する。

10 もつとも、意味を捨象した実存的経験だけを扱うティチナーの実存心理学は、意味としての感情をその担い手である感覚によつて記述するのだといわれればそれまでであるが。